

七十七ビジネス大賞受賞

第22回(2019年度)

企業 インタビュー

Interview

株式会社ケディカ

代表取締役 三浦 智成 氏



会社概要

住 所：仙台市泉区明通3丁目20

設 立：1954年（創業1946年）

資 本 金：98百万円

事業内容：金属製品製造業

従業員数：150名

電 話：022（777）1351

U R L：http://www.kedc.co.jp/

総合表面処理メーカーとして 培ったノウハウを活かし新 技術開発へ挑戦、地域のリー ディングカンパニーを目指す

今回は「七十七ビジネス大賞」受賞企業の中から、株式会社ケディカを訪ねました。当社はめっき加工を主体とした総合表面処理メーカーであり、県内最大規模の工場を有し、宮城、岩手、フィリピンの3拠点において、国内外の自動車、半導体および電子部品メーカー等へ表面処理製品を供給しています。今次、めっき加工などの表面処理で培った洗浄技術を応用し、東北大学病院等と共同で医療用器具向け洗浄剤を開発しました。当社の三浦社長に、今日に至るまでの経緯や事業内容等についてお伺いしました。

——七十七ビジネス大賞を受賞されたご感想をお願いします。

「表面処理業を通じて地域貢献を行う」という当社の経営理念と合致しているこのような賞をいただけてありがたいと思っています。

当社は表面処理業が主な事業ですが、現在においても昔ながらの「めっき屋さん」というイメージや、危険できついというイメージが残っています。しかし表面処理業はめっきだけではなく、多種多様の加工を施している事業なので、そのイメージを払拭したいという思いがありました。この受賞が、当社の事業内容や製品についてより多くの方々に知っていただく機会になれば嬉しいです。いただいた奨励金については医療事業のさらなる拡大、次なるステップを目指し、開発費等に活用したいと思います。

営業職から製造業の社長へ

——社長就任に至るまでの経緯について教えてください。

当社は1946年に祖父が仙台市若林区で創業しました。本社は一度太白区へ移転した後、1998年に現在の泉区にある社屋へ移転しました。各工場については、1982年に岩手県北上市にて操業、1985年に泉パー

クタウン工業団地内にて泉工場を操業、2003年にケディカフィリピンを設立し、現在に至ります。

私自身は、大学卒業後工業薬品を取り扱う別の会社に就職し、営業の仕事をしていましたが、父の要望もあり、1999年に当社に入社しました。入社後は北上工場の立て直しを行い、2007年にケディカフィリピンの社長に就任し業務を行って来ました。社長職については、2013年に私の父から叔父へ引き継ぎ、その2年後の2015年4月に私が3代目社長に就任しました。本来、父のすぐ後に私が就任するという話もあったのですが、当時ケディカフィリピンの副社長が急逝し、フィリピンに常駐しなければいけないという事情があったため、2年後に就任という形になりました。それまで営業の仕事が長かったため、社長という立場になり、営業を部下に任せる場面が多くなったのは大きな変化でした。



本社

地元への貢献

——経営理念について教えてください。

「表面処理技術の開発を通じて、地域産業の振興と社会の発展に貢献する」が当社の経営理念です。この理念は父である三浦修市が立てた理念です。表面処理業は製造業ではありますが、実際に製品を生み出す産業ではありません。あくまでも、お客様からお預かりした製品に表面処理を施し付加価値を加えてお返しする、という業態です。そのような特性上、お客様とコミュニケーションを取り、細かく要望をお伺いすることが必要不可欠です。また、当社は創業から70年以上仙台市に本社を置く地元根付いた企業ですので、地元企業やお客様との深い結び

つきを大事にし、社会に貢献していきたいという思いが経営理念に込められています。

その思いから事業以外にも、当社の特性を活かした「仙台市理科特別授業」や「仙台市青葉少年少女発明クラブ」といった子どもたちを対象とした社会貢献活動にも積極的に取り組んでいます。普段の学校の授業ではできないようなめっき実験等を行っており、これまで応募も沢山いただいて、仙台市のほかにも気仙沼や志津川、亘理といった東日本大震災で被害を受けた地域の小学校にも足を運びました。また、ケディカフィリピンにおいても、貧しい子どもたちのために、学費と給食を無料で提供する幼稚園の設立への協力や課外活動としてケディカフィリピンの工場見学の企画等を行っています。



社会貢献活動の様子

総合表面処理メーカー

——事業内容について教えてください。

当社の事業内容は大きく分けて3つあります。まず1つ目は表面処理事業です。めっき処理をはじめとした、製品への塗装や研磨といった処理を施します。通常、製造業というと、その分野に特化して製造を行っている会社が多いのですが、表面処理はあらゆる分野の製品で必要となる事業です。よって、当社が携わっている業種は小さい精密機器から自動車関連まで多岐にわたります。

2つ目は環境計量事業です。表面処理を行う上で必ず成分を分析する工程が伴うので、その当社の分析技術を活かして、河川や工場排水などの水質検査や土壌検査を行う計量証明事業と作業環境測定事業に取り組んでいます。作業環境測定で、粉塵、有機

物、特化物、金属など人体に影響を及ぼすものがきちんと国が定める法定基準を満たしているかという分析を行い、しっかりその基準を守っていれば、従業員はより健康的に、働きやすくなります。環境への配慮というのは特に心掛けていることでもありますし、この事業を通して周辺の企業にもお役に立てればいいなと思っております。

3つ目が医療関連事業です。ケディクリーンの開発以外にもCTや人工呼吸器といった医療器具の部品製造にも携わっており、今後も事業を拡大していきたいと考えております。

——各工場の営業内容を教えてください。

当社は県内に北工場、南工場、東工場の3工場のほか、岩手県の北上市に1工場、フィリピンに関連会社をもっており、各工場の専門分野を分けて、お客様からのあらゆるニーズに対応しています。北工場では半導体を専門に取り扱っています。半導体と一口に言っても、ゲーム機や携帯電話、自動車など日常で目にする様々な電子機器に半導体は組み込まれており、当社はICリードフレームの外装めっきや、それに関わる様々な業務を行っています。南工場は、インセンティブ部品や精密機器等への機能めっきをはじめとする表面処理を行っており、東工場では、建築資材等の大物・長尺製品の量産を行っています。また、岩手県の北上市工場では、自動車部分から電子部品まで多岐にわたる表面処理を行っており、製造の約6割が自動車関連部品です。このようにそれぞれの工場毎作業内容を分け、効率的な生産体制を構築し安定した品質の製品製造を心掛けています。



工場内の様子

——県外や国外に拠点を置いた理由を教えてください。

東北地方はよく、青森・秋田・岩手の北東北と、宮城・山形・福島以南の南東北に分けて考えられることが多いと思います。東北全域を対象に事業をしていきたいと考えたときに北東北は仙台から少し距離があるなと思いました。そこで、元々製造業に力を入れていて、企業誘致にも積極的だった北上市に目を向けました。北上市は新幹線の駅や高速道路のインターチェンジもあり、物流的にも立地がいい場所で、実際工業団地も数多く出来ています。そういった物流的にも工業的にも利便性のある北上市に拠点を置けば、うまく北東北もカバーできると思い、北上市に進出しました。

国外進出については、これまでも度々お話を頂く機会がありました。しかし、先ほど述べた通り、表面処理業はお客様からお預かりしたものに加工を施す業態ですので、どういうめっきの種類が必要かも分からず、お客様もいない土地での開拓というのは難しい面がありました。また、中国やタイは進出企業が飽和状態になっていたこともあり、なかなか国外進出は実現しませんでした。

ある時、岩手のお客さんからフィリピンに来てみないかという話があり、フィリピンに下見に行くことになりました。するとフィリピンではタガログ語という言語以外に英語が日常的に使われており非常にコミュニケーションが取りやすいことが分かりました。また、フィリピンには寒い冬がないということも当社にとっては大きなメリットでした。表面処理の工程では製品を液体に浸漬する作業が多くあります。そのため、配水管が凍るといったトラブルが起きる心配がないというのはすごく良かったです。その当時、フィリピンには同業者の進出企業も少なく、当社の特性や希望と合致した部分が多かったことでフィリピンに進出しました。

多様な教育研修

——人材育成について教えてください。

人材育成は当社が1番と言ってもいいほど力を入れて取り組んでいる内容です。一例にはなりますが、技術系の社員を東京にある表面処理の専門学校へ毎年派遣し、そこで学んできたことを社内で教育するというのを繰り返して行っています。フィリピンの社員についても、HIDAの事業を利用して、毎年

必ず1名日本に呼んで教育をしています。HIDAとは開発途上国の産業人材を対象に研修や技術協力を推進する人材育成機関のことで、反対に、日本の社員も定期的にフィリピンに駐在させ、技術の共有をはかっています。人材育成は技術面だけではなく、言語面でも取り組んでいます。フィリピンでは英語が使われているため、仙台在住のフィリピン人の先生を呼んで英会話学習をしたりしています。

また、1975年から管理・作業等あらゆる業務にQC活動を導入しています。グループごとに、品質向上や顧客満足度の向上、作業工程の管理・改善等について考え、発表することで会社全体の技術力や生産性の向上に努めています。



QC活動の記録

ケディクリーン

——ケディクリーンについて教えてください。

医療用器具に付着するタンパク質系の汚れと歯科等で使用するセメントを総合的に除去する洗浄剤です。開発のきっかけは、元々連携のあった宮城県の新産業振興課から東北大学病院で行っているAcademic Science Unit、いわゆるASUを紹介され、2014年から参加したことです。このASUという取り組みは、東北大学病院の中を自由に会社技術を活かせそうなものを探し、事業に繋げるといえるものです。最初にその内容を聞いた際、ぜひ参加してみたいと思いました。その取り組みを通し色々な分野の方にお話を聞く中で、材料部で医療器具の洗浄に非常に苦労しているという話がありました。手術器具や歯科用器具というのは、血液や体液といったタンパク質の汚れと、型を取る時などに使用する

セメント系の汚れが付着します。それを洗浄するためには、複数の薬品を使用し、セメント系の汚れをしっかりと落とすためにブラシ掛けを行う必要があるとのことでした。そして、その方法だと手間や時間、人件費がかかるとともに、器具を直接ブラシ掛けすることで危険も伴うため、器具を使い捨てにしているケースもあるという状況でした。

そこで当社の洗浄技術を活かせないかと考えました。表面処理の工程では始めに製品の洗浄作業が必要です。表面処理を施す前に油や汚れをきれいに除去してまっさらな状態にしないと、表面処理の加工が製品にうまくできません。高い洗浄技術というのは元々当社でもっていたので、それを応用して洗浄工程の短縮や様々な汚れをまとめて除去することができる洗浄剤の開発に取り組みました。



ケディクリーン

——開発において苦労した点を教えてください。

業界初の取り組みということもあり、開発には2、3年かかりました。医療系の分野はこれまでも関わってききましたが、今回はより直接人体に触れる製品の開発なので苦労しました。というのも、洗浄成分を強力にしまえば簡単に汚れを落とすことはできますが、そうすると医療器具の表面にもダメージを与えてしまうことになるので、成分の配合の加減が難しく、いかに器具にダメージを与えずに素早くタンパク質とセメントの相反する汚れを取るかというところは悩みました。最終的には、タンパク質汚れと歯科セメントを同時に除去でき、さらに予備洗浄やブラッシングの手間を省くことが可能な洗浄剤をつくることができました。

——実際の医療機関での活用実績を教えてください。

まずは東北大学の多くの医療関係機関でこの製品を使用いただいています。あとは地元の歯科医院をまわっての営業や、情報誌掲載、展示会への出展などを行い、全国から問い合わせが来しました。しかし、中小企業なので確実な販売網を持っていないということが苦労しているところです。当初は、コンビニより多いといわれている歯科医院を販売ターゲットとして想定していましたが、実際に需要が多いのは大病院で、そちらに重点的に販売を行っています。洗浄する器具の数、洗浄にかかる時間などが膨大なことが要因かと思います。海外からの問い合わせもありましたが、現在コロナウイルスの影響でやり取りが出来ていない状況です。



——御社の開発体制について教えてください。

技術開発や研究はASUの取組みも含め、常に複数のを同時進行で進めています。中小企業は大企業と比べると会社としての体力や人材も少ないので、大変な部分があります。ただ、総合表面処理業において技術力の向上や工程の改善のために、開発や研究はとても必要なことだと考えているので力を入れて取り組んでいます。具体的には、技術開発のための独立した部門を作り、製造ラインとは切り離して単独で開発や研究が行える環境を作っています。使用している解析装置や機械類もお金をかけて充実した設備を揃えています。



研究所内の様子

——今回、コロナウイルス感染拡大による影響や対応について教えてください。

テレビなどでは外食産業や観光業、イベント関係の職業がクローズアップされることが多いですが、もちろん製造業にも影響はあります。やはり、これだけ大きな影響が出ると、少しずつ状況が戻ってきても、しばらくは大きな買い物を控え節約志向になるという方が多いのではないのでしょうか。そうすると、状況が収まってもモノがあまり売れなくなり、製造業が大きく影響を受ける事態になるかと思います。当社としても自動車部品から半導体まで幅広く影響が出るだろうと考えています。これまでリーマンショックや東日本大震災を経験してきましたが、その経験から学んだこととして、製造業というのはこうしたアクシデントから受ける影響が遅れてやって来ます。最低でも2カ月、長いと半年くらい遅れてくると思います。今回、最も目に見えて影響が分かるのは自動車業です。報道にもあったように自動車メーカーの製造工場が海外・国内問わず製造中止となったので、製造の半分以上を自動車部品が占めている北上工場は特に影響が出ると思います。

その一方で、人工呼吸器等医療分野はもちろん、5G事業も外出自粛やテレワークの影響で需要が伸びていくと思います。これらの分野は今後事態が収束しても落ち込みにくい分野だと思うので、当社としても力を入れていかなければいけないと感じています。

社内的な対応としては、まず一般的な感染予防は徹底しています。基本的に全員マスクを着用し、社内のあらゆる場所の消毒をし、来社した方にもマスク着用と検温を必ずお願いしています。ソーシャル

ディスタンスを心掛け、会議等の会場もより広い場所で社員同士離れて座るように気をつけています。また、私はケディカフィリピンの社長も兼務していて、以前は毎月フィリピンに行っていたのですが、それが出来なくなってしまったので、全てテレビ会議で対応しています。北上工場とのやり取りや、定期的に行っていた外部の先生の研修等も同様です。やはり、製造業では在宅勤務という形はとれないので、こういった感染予防をしっかりと行うほかないと思っています。

——抗菌めっきに関して何かお考えはありますか。

今回の新型コロナウイルス感染拡大を受けて、カラオケボックスの経営をしている方からマイクに抗菌めっきを施すことはできないかという問い合わせがあったりしました。当社でも抗菌めっきは取り扱っておりますが、それがコロナウイルスに対応するかどうかの実証は出来ていません。ノロウイルス等に効果があることは分かっているので、おそらく効果を発揮するだろうと考えていますが、中小企業ではなかなかそういったデータの採取も難しい部分があります。もし今後、実証が可能になるならば、そういった世の中の皆様をウイルスからガードするような案を考えていきたいなと思っています。

医療器具の再生

——今後の事業展開について教えてください。

今回医療分野において、東北大学病院、東北大学とパートナーシップを結び、ケディクリーンという実績を出すことができました。それをきっかけに、東北大学病院から色々と相談をいただく機会が増えました。それをビジネスチャンスに繋げていきたいと思い、現在、様々な依頼にチャレンジしています。例えば、医療器具の洗浄過程では、洗浄用のかごに全て刻印がされていて、それを読み取ることでモノを区別したり、次の工程に流したりと、自動化されているのですが、その洗浄用かごの刻印の汚れを除去する方法を考えてほしいといった要望がありました。

また、医療器具の再生事業にもチャレンジしています。手術をした際に開胸した身体を固定しておく「スパーテル」という道具があるのですが、それは手術部位や患者さんによって曲げて形状を変え使用す

るため、使い捨てにしているそうです。そこで、「スパーテル」を再利用できるようにしてほしいという依頼がありました。これには表面処理業におけるレベリングという、曲がってしまったものを平滑にするための装置が活用出来ないかと考えているところです。

大学との繋がりも何十年前からありますので、その連携も大切にしていきたいと思っています。1番多いのはやはり地元の東北大学で、あとは近隣の山形大学です。大学の開発の中で表面処理的に困っていることや改善したいことを相談いただくことがあるので、将来的に役立つものの開発に協力していきたいと思っています。

人との繋がりを大事に

——会社経営で大切だと思うことについて教えてください。

やはり大切なことは、人です。人を大事にする、それに尽きるかなと思っています。それは社内の社員の教育やレベルアップに尽力するということも含め、周りの人との繋がりを大事にするということです。横の連携、縦の連携はもちろん、業界を超えたところの繋がりなど全ての人との繋がりを私自身これまでも1番大事にしてきましたし、これからも大事にしていきたいです。アドバイスというほどのことではないかもしれませんが、それは常に考えておくべきことだと思います。



三浦社長

長時間にわたりありがとうございました。御社の今後ますますの御発展をお祈り申し上げます。

(2020.5.20取材)